

2000年度 安田賞 講評

選考委員代表 安 藤 文四郎

本年度の安田賞には、別表のように10点の卒業論文が推薦されました。選考委員会による審査の結果、そのいずれもが力作と評価され、優秀論文として表彰されました。

またその中で、梶原久美子さん（芝田ゼミ）の論文が本年度の最優秀論文に選ばれました。この論文は、筆者の住む神戸市東灘区で近年急増している日系ブラジル人のいわゆるUターン出稼ぎ労働者を対象にして、精力的に取材活動をおこない、その結果を生き生きとしたルポルタージュに仕上げたものです。

梶原さんは、単にインタビューアとして日系ブラジル人たちから取材することに満足せず、自らも彼らが多く働く東灘区深江の食品工場にアルバイトとして通い、彼らと一緒に製造現場で働きながら親しく話し合える関係を作り、その上でインタビューを申し込んで、彼らが毎日の暮らしの中で考えていることや、生活していく上で困難に感じている点に触れようとしてきました。

このような努力によって多くの興味深い事実が発見されています。たとえば、海外からのデカセギ＝貧困層という認識は間違いであり、彼らの多くはその学歴や収入の点で本国では中産階級に属していることが報告されています。それにもかかわらず、1年分の賃金を貯めて帰国すれば3LDKの家が買えるという両国の賃金格差があるがために、ブラジルに帰国後、周囲の人々と軋轢（あつれき）が生じたり、ブラジル社会への再適応の問題が生まれるなどして、再び来日するケースが増えているということです。

その他にも、日本語がほとんど話せない20歳代の日系3世から50歳代の日本語が完璧に近い日系2世に至るまでの、ブラジル人労働者たちの来日の目的や、深江地区に移り住んだ理由、これまでの日本の生活で体験したことなどが興味深く描かれ、また長期間滞在する者や家族の大半が来日しているケースが増えつつある中で、子どもたちの抱える問題や行政の対応が遅れがちである点なども指摘されています。

最後に、我々の社会が、異なる文化的背景をもつ人々を受け入れることの出来る社会となるために、そのテストケースとして、日系ブラジル人たちの問題を考えるべきだと筆者は提言しています。たしかに、異なるエスニシティ・文化をもつ人々との「共生」は、21世紀を通じて日本社会の重要課題の一つであることは間違いありません。

以上でその簡単な紹介を終わりますが、アプローチのユニークさと内容のインプリケーションのいずれについても、梶原さんの論文が高く評価され、最優秀論文賞を授与されました。

最優秀論文	卒業論文名
梶原久美子 (芝田 正夫ゼミ)	「神戸市東灘区における日系ブラジル人コミュニティを考える」
優秀論文	卒業論文名
寺尾 智子 岡本 卓也 (佐々木 薫ゼミ)	「心理的マイノリティ感・マジョリティ感の成立要因の探索」
拝地 俊行 (真鍋 一史ゼミ)	「質問紙調査における選択肢の研究 あなたは今の生活にどの程度満足していますか —「大変」「大いに」「かなり」「十分」それとも「非常に」ですか—」
平居裕美子 (高坂 健次ゼミ)	「現代社会における医者—患者関係 —『ブラック・ジャック』を手がかりとした医療知識社会学的考察—」
河合 洋尚 (対馬 路人ゼミ)	「中国系宗教の日本への適応と変容 —一貫道にみるシンクレティズムの諸相—」
重田 昌宏 (藤原 武弘ゼミ)	「祭りで魅力ある地域をつくる —集団の同一視と集団間態度の縦断的研究を通じて—」
小林 夏生 (大谷 信介ゼミ)	「芦屋市政モニター制度の現状と課題 —市民と行政間の認識のズレに着目して—」
小林真由子 (三浦耕吉郎ゼミ)	「震動する〈芸術〉」
前田 隆久 (野波 寛ゼミ)	「社会的ジレンマ状況におけるコモングの状態の影響—シミュレーション・ゲームを用いて—」
湯川 理子 五島亜希子 (浅野 仁ゼミ)	「癌患者に対するターミナルケアに関する研究—ソーシャルワークの視点から—」